東京ジャーミイ金曜日のホタバ

2009年11月20日

犠牲

親愛なるムスリムの皆様。ご存知のように、アッラーに近づき、アッラーのご満悦を得るために屠る動物を「犠牲とする動物」と呼称します。知性を備え、旅行中でなく、宗教的解釈において金銭的に可能であるとみなされた人は皆、動物を屠ることによって、アッラーに、そして犠牲を屠ることのできない人々への援助をすることによって、人々に、より親しくなるのです。そもそも犠牲は、ムスリムが、必要となれば全財産でもアッラーの道のためにささげることができるということのしるしとなります。

イスラームは、一方では個人を、神意や人間的な徳に到達することを助け、また一方では集団、社会のために、一体化、統一をもたらす命令や規律を定めています。イスラームの教えのこの優れた特性は、ザカート、巡礼、犠牲といった社会的規模での財産に関するイバーダにおいて、よりはっきりと現れています。

犠牲を捧げるというイバーダは、クルアーンでも、また親愛なるムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）のスンナにおいても見出すことができます。「それらの肉も血も、決してアッラーに達する訳ではない、かれに届くのはあなたがたの篤信（タクワー）である。このようにかれは、それらをあなたがた（の用）に供せられるが、これはあなたがたへのかれの導きに対し、アッラーを讃えさせるためである。善い行いの者たちに吉報を伝えなさい」（巡礼章第３７節）と表明され、犠牲を捧げる行為が肉の必要性に応じる為ではなく、イバーダ（崇拝行為）という意図をもつものであることを明らかにされています。預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）も、犠牲を捧げることを一つのイバーダとして認められ、またご自身も犠牲を捧げられました。預言者ムハンマドが７頭のラクダを犠牲として屠られたこと、またマディーナでは角があり、色のついている２頭の羊を屠られたことがアナスによって伝承されています。

信頼できるハディースで見られる伝承として、預言者ムハンマドがイードル・アドハー（犠牲祭）でアッラーの観点から最も愛されるイバーダは犠牲を捧げることであること、犠牲の動物が屠られるや否や、アッラーによって承認されること、捧げられた動物の角やつめに至るまで、全てが、その人の善行として記録されるであろうことを明らかにされ、アッラーのご満悦のためにこのイバーダを行うことを推奨されました。

親愛なるムスリムの皆様。近年は動物を屠る代わりに、それに等しい金額を貧しい人たちに与えることがより適当である、という見方が広まっています。多くの派では犠牲を捧げることはスンナですが、ハナフィー派ではワージブとされています。ただ、イバーダがファルドではないことが、それがイバーダであることを否定しないのと同様に、そのやり方を変化させる必要もありません。イバーダには形式、条件があるように、神意や目的、根拠があります。イバーダにおけるこれらの特質をそれぞれ切り離して考えることは不可能です。法学の面からの見解がワージブであれ、スンナであれ、犠牲を捧げるというイバーダは、犠牲として、動物が定められた方法で屠られることによってのみ達成されます。対価を支払うことによっては、このイバーダを実践したことにはならないのです。

一匹の羊を屠ること以上に、イブラーヒームが息子イスマーイールを犠牲として捧げようとしたような、力強く確固たる信心を、アッラーが私たちに与えてくださいますように。